

1 研究の目的

- (1) 新しい時代に対応できる「生きる力」を育てる
 - ・学校教育目標「国際社会にはばたく南の子 ～夢と自信をはぐくむ～」の実現に向け、社会の激しい変化に対応できる資質や能力を身につけ、夢をもって自分の将来を自分で切り拓いていく児童の育成を目指す。
- (2) 新しい教育の在り方を学び、実践する
 - ・新しい教育の在り方を学び、教育実践にあたる。そのために研究と研修を一体化させる。
- (3) 教育専門職として必要な、資質・指導力の向上に努める
 - ・学校教育目標「国際社会にはばたく南の子 ～夢と自信をはぐくむ～」の具現化に向けて日々の指導力を高め、教育実践に努める。

2 研究主題と設定の理由

(1) 研究主題

共に考え、深い学びを実現する学習をめざして

(2) 設定の理由

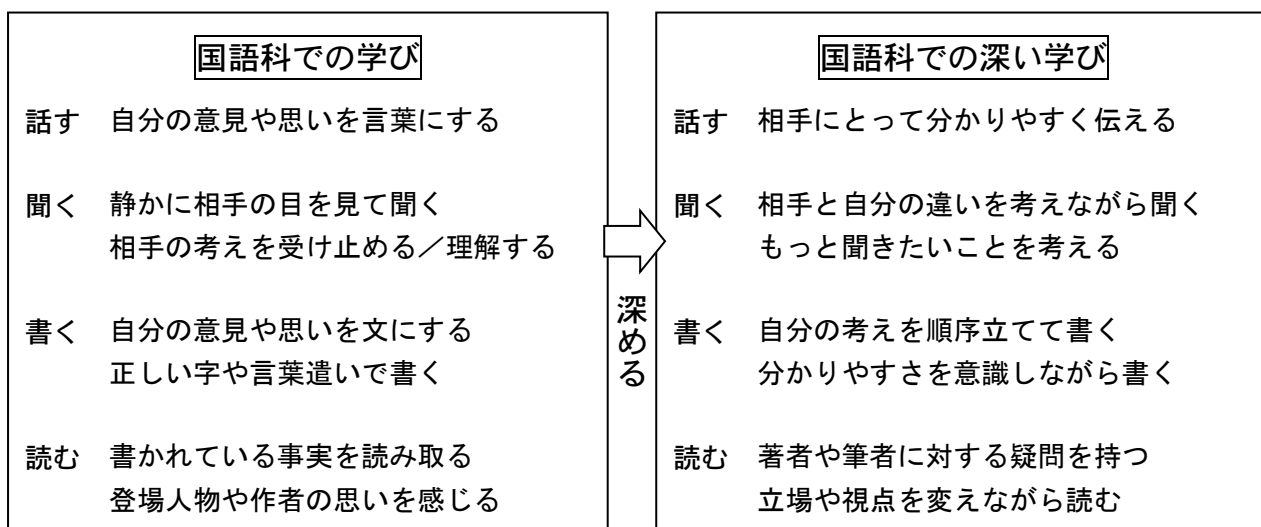
現行の学習指導要領では、授業改善の視点として「主体的・対話的で深い学び」が掲げられている。本校では学校教育目標やこれまでの校内研究、児童の実態等を踏まえて、研究主題として「共に考え、深い学びを実現する学習をめざして」を設定した。

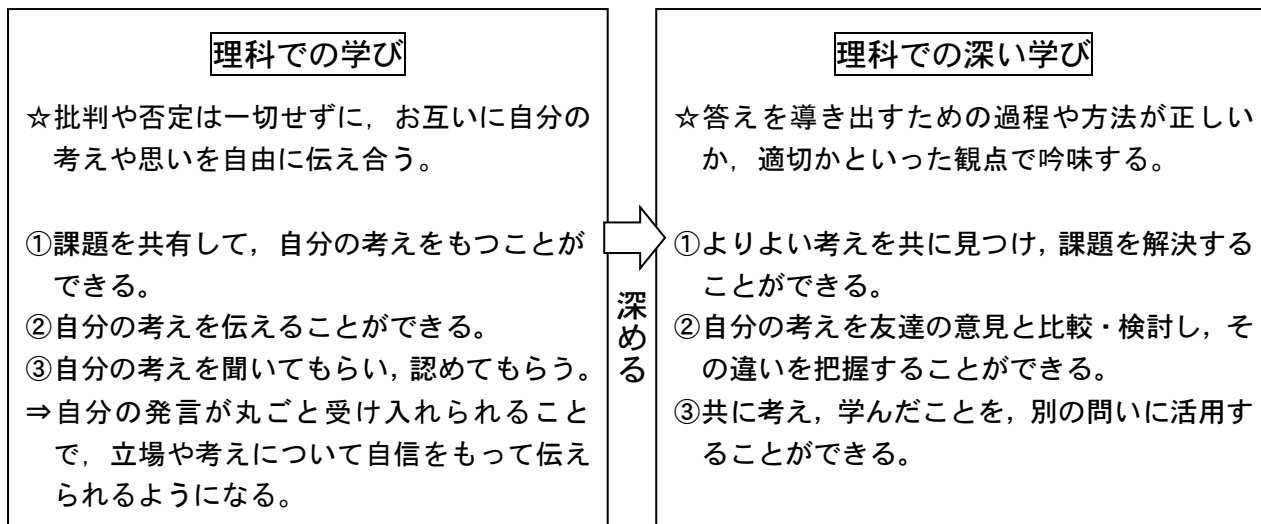
① 共に考える

これまでの授業では、教師からの発問に対して、受け答えをする場面が多かった。この場合、答える児童と教師で対一の関係になりやすく、ほかの児童は傍観者になってしまう。この状況を改善して、より主体的に学ぶために、児童同士が「共に考える」という視点を設定した。

② 深い学びを実現する

本校では「学びを深める」ということを、以下のように定義した。





文部科学省では「深い学び」について、各教科の見方・考え方を働かせながら、知識の関連付けや情報の精査、解決方法を見出していくことで達成できるとしている。単に考えをもつだけでなく、発達段階に合わせて自分の課題としてとらえ、何度も問い直したり、学習で得た知識を活用したりする姿を目指していきたい。そのために「深い学びを実現する」という視点を設定した。

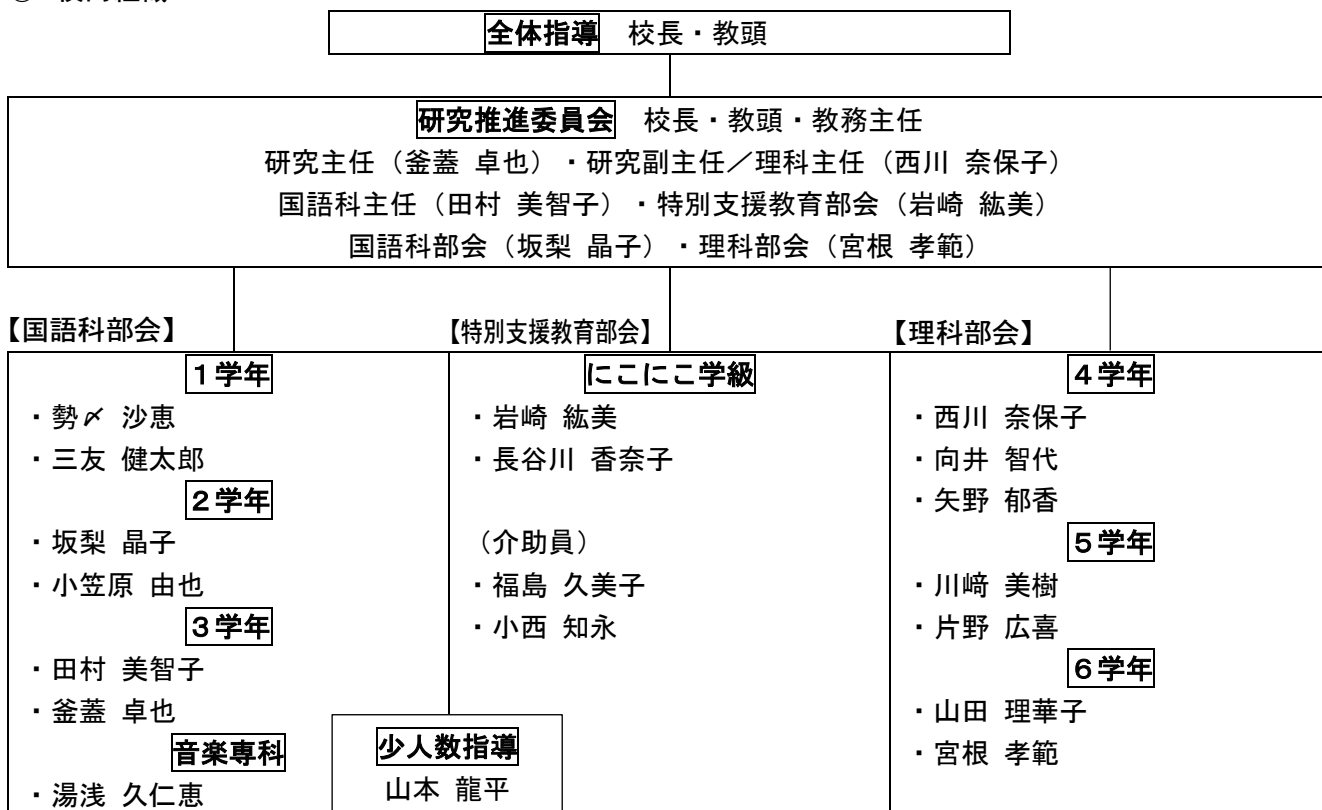
3 研究教科と研究体制

(1) 研究教科

- 下学年（1～3学年） 国語科
- 上学年（4～6学年） 理科

(2) 研究体制

① 校内組織



○国語科部会，理科部会，特別支援教育部会の3部会とする。

○年間を通して，1人1回以上は授業研究を行い，部会内で相互に意見交換をする。

② 年間の主な流れ…研究計画の樹立，授業研究を通じた改善（適宜見直しを行う）

1学期

- ・ 学習指導要領の内容や授業の様子などをもとに，児童の実態把握を行う。
育てる資質や能力の設定，教科書等の教材研究
- ・ 指導案をもとに部会で検討するとともに，講師から指導・助言をうけ，研究授業を実施する。

夏季休業

- ・ 1学期の授業を振り返り，2学期に向けて授業研究を進める。
- ・ 指導室訪問に向けた準備を進め，授業研究に取り組む。

2学期

- ・ 指導案をもとに部会で検討するとともに，同じ講師から指導・助言をうけ，研究授業を実施する。
- ・ 指導室訪問の授業研究を通じて，国語科・理科以外の教科に対する研究を深める。

3学期

- ・ 指導案をもとに部会で検討するとともに，同じ講師から指導・助言をうけ，研究授業を実施する。
- ・ 今年度の研究の成果と課題をまとめ，次年度の計画を立てる。

③ 指導講師

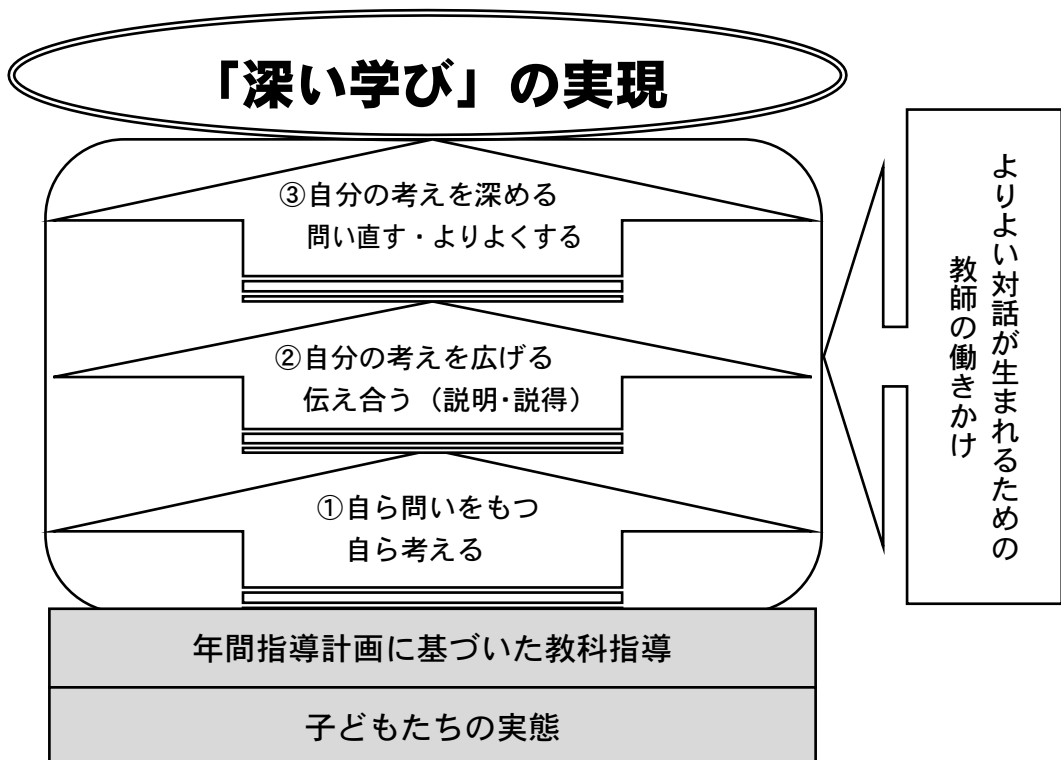
研究全体	富津市立天羽小学校 校長	横田 経一郎 先生
国語科部会	八千代市教育委員会 指導主事	永山 裕基 先生
理科部会	八千代市立高津小学校 教諭	井桁 孝之 先生
特別支援教育部会	植草学園短期大学 子ども未来学科 教授	堀 彰人 先生

4 研究仮説と研究の重点

(1) 研究仮説

よりよい対話が生まれるように，教師が働きかけを工夫すれば，考えを共に見つけ，課題を解決し，深い学びを実現することができるだろう。

「共に考える」「深い学びを実現する」という研究主題を達成するために，研究仮説として，よりよい対話が生まれるための教師の働きかけを設定した。本校では学びの深まりを，以下の流れで想定している。



国語科と理科における「対話」には、様々な種類がある。物語の作者や説明文の筆者との対話、物や事象との対話などが挙げられるが、本校の研究における対話は「自分との対話」そして「児童同士の対話」に絞って定義している。単に事実や自分の思いを伝え合うだけではなく、自分の考えを明確にしたうえで、お互いの考えの違いに気付いたり、一つの答えを導き出したりすることが「対話」とする。

教師から与えられた問題に対して、受け身で考えるのではなく「自分はこうしたい」「どうすれば解決できるのか」といったように、自分の問題として捉えられるようにしたい。

それでは、よりよい対話が実現した子どもたちとは、具体的にどのような姿を示すのだろうか。本校では以下における言葉が子どもたちの中から生まれるようにしていきたい。

めざす児童の姿	対話を中心とした学び ⇒ 自分の意見や考えにこだわる子どもへ
国語科におけるキーワード	
「この言葉から～ということが分かる／想像できる」「もし自分だったら～だと思う」	
「この作品で作者が伝えたいことは～だ」「筆者はこう書いているけど、自分は～だと思う」	
理科におけるキーワード	
「これはどういう意味?」「そもそも～って」「どうしてそう思うの?」「本当にそうだろうか」	
「例えばどういうこと?」「でも、反対もあるよね」「～だとしたら」「もしそうなら～となる」	

ただ低学年ではこのような「よりよい対話」は難しい部分も多い。発達段階に合わせて、読む・書く力の指導から対話のトレーニングを重ねていき、少しずつ高めていく。4～6年は国語科での学習を活用するとともに、理科と国語科の相互で対話の質を高めるようにしていく。

単元構成や本時における展開では、以下で示した「考えを形成するために必要な力」「思考力・判断力・表現力等」「見方・考え方」をもとに、身につけさせたい力を発達段階や学級の実態に合わせて設定する。4～6年生は、国語科の学習を生かして、理科の「見方・考え方」を育てていく。

学年	国語科「考えを形成するために必要な力・目標にすべき姿」 ①話す②聞く③話し合う④書く⑤読む
1	① 相手に伝わるように、行動したことや経験したことに基づいて、話す内容の順序を考える。 ② 話し手が知らせたいことや自分が聞きたいことを落とさないように集中して聴き、話の内容を捉えて感想をもつ。
2	③ 互いの話に関心をもち、相手の発言を受けて話をつなぐ。 ④ 言葉や文のつなぎ方に注意しながら、内容のまとまりが分かるように表し方を工夫する。 ⑤ 文章の内容と自分の体験を結び付けて、感想をもつ。
3	① 相手に伝わるように、理由や事例などを挙げながら、話の中心が明確になるように構成を考える。 ② 必要なことを記録したり質問したりしながら聴き、話し手が伝えたいことや自分が聞きたいことの中心を捉え、自分の考えをもつ。
4	③ 目的や進め方を確認し、司会などの役割を果たしながら話し合い、互いの意見の共通点や相違点に着目して、考えをまとめる。 ④ 自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にして、書き表し方を工夫する。 ⑤ 文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもつ。

5	① 話の内容が明確になるように、事実と感想、意見とを区別するなど、話の構成を考える。 ② 話し手の目的や自分が聞こうとする意図に応じて、話の内容を捉え、話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめる。 ③ 互いの立場や意図を明確にしながらか計画的に話し合い、考えを広げたりまとめたりする。
6	④ 目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするとともに、事実と感想・意見とを区別して書いたり、引用や図表・グラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫する。 ⑤ 文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめる。

学年	国語科	理科	国語科	理科
	思考力・判断力 ・表現力	見方・考え方	学びに向かう力、人間性	
1	順序立てて考える力や、感じたり想像したりする力を養い、日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えをもつことができる。		言葉がもつよさを感じるとともに、楽しんで読書をし、国語を大切にしてい、思いや考えを伝え合おうとする態度を養う。	
2				
3	筋道立てて考える力や、豊かに感じたり想像したりする力を養い、日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えをまとめることができる。	相違点や共通点を基に、問題を見いだす力 ★複数の事物・現象を対応させ比べる。	言葉がもつよさに気付くとともに、幅広く読書をし、国語を大切にしてい、思いや考えを伝え合おうとする態度を養う。	自然を愛する心情 生物を愛護する態度 生命を尊重する態度
4		既習の内容や生活経験を基に、根拠のある予想や仮説を発想する力 ★事物・事象を様々な視点から関係付ける。		意欲的に自然の事物・現象に関わろうとする態度
5		予想や仮説を基に、解決の方法を発想する力 ★事物・事象に関係する条件とそうではない条件を制御する。	言葉がもつよさを認識するとともに、進んで読書をし、国語の大切さを自覚して思いや考えを伝え合おうとする態度を養う。	粘り強く問題解決しようとする態度 他者と関わりながら問題解決しようとする態度
6		より妥当な考えをつくりだす力 ★事物・事象を多面的に考察する。		学んだことを自然の事物・現象や日常生活に当てはめてみようとする態度

(2) 研究の重点目標と手立て

【研究の重点目標】

よりよい対話が生まれ、深い学びを実現するための教師の働きかけを考える。

【目標達成に向けた手立て】

- ① よりよい対話が生まれるための教師の働きかけを工夫する。
 - ・多様な考えが生じる場面を意図的につくる。
場づくり…国語科 作品の提示方法（すべて／途中まで、音読、同じ作者の作品を比較）
理科 素材の吟味、事象の見せ方／見せるタイミング
思考をゆさぶる発問、補助発問、机間指導における声掛け
 - ・自分の考えを検討し、ノート等にまとめる時間を確保する。…自分との対話
予想、分かったこと（事実）、考えたこと（考察）、もっと調べてみたいこと（疑問）
 - ・児童が「やりたい」「知りたい」と感じるような、必要感のある交流の場の設定をする。
 - ・対話の土台となる「話す・聞く」のスキルを身に付けさせる。
（マニュアル、話型、国語のたからもの（使うキーワード）、話し合いのトレーニング）
 - ・全学級共通で掲示している「聞き方名人」「話し方名人」を教科横断で取り組ませる。
 - ・目的に応じて、対話の人数や形態を工夫する。

聞き方名人

あ いてを見て聞く
い っしょうけんめい聞く
う なずきながら聞く
え がおで聞く
お わりまで聞く

話し方名人

か ながえをはっきり話す
き く人の方を見て話す
く ちを大きくあけて話す
け つろんや要点を話す
こ えの大きさ・速さを考えて話す

- ② 児童の意欲を高めるための授業構成を工夫する。
 - ・児童から出る多様な気付き・発見・疑問を生かして、学習問題を立てる。
 - ・考えの変容や新しい気付きを、グループや学級全体で共有する場面を設定する。
 - ・児童の発言の中からキーワードを拾い、次時につなげる。
 - ・自分の学びを自分の言葉でまとめる時間を確保する。→自己評価の場の設定

【仮説検証の方法・学びが深まった児童への評価】

- ・教科書の評価規準をもとに、単元における達成目標を設定する。
- ・ノートやワークシート、授業中の発言等を比較して、学習前後の変化を評価する。
国語科 初発の感想と単元終了後の感想
理科 事象の意味付けをする、事象についての説明をする
これまでの生活経験や学習を生かして実験方法を検討する、活用課題を解決できる